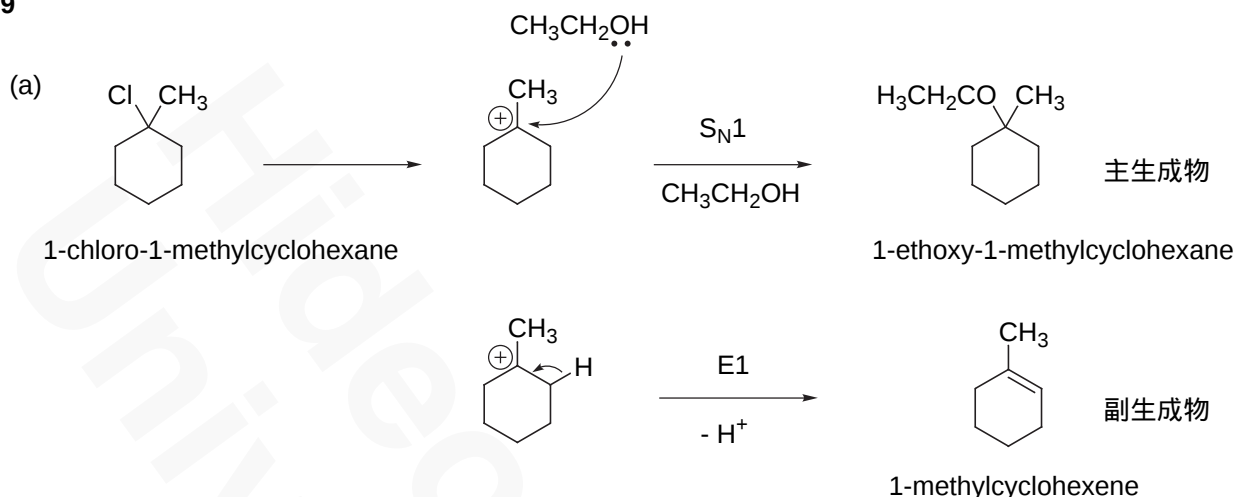
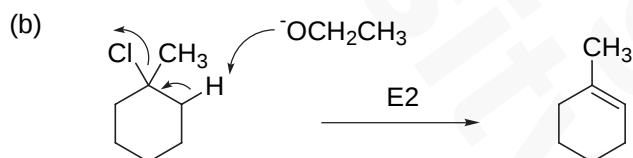


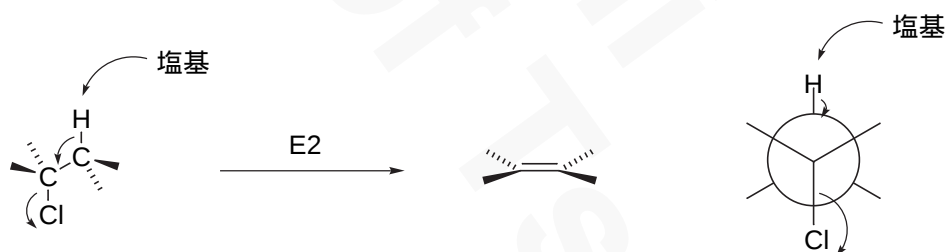
## 6.19



3級ハロゲン化物は $S_N2$ 反応は起こしにくい。また、このような条件（強塩基性ではない条件）では脱離反応よりも $S_N1$ 反応が優先するので、上記のエーテル体が主生成物として生成する。また、E1反応生成物であるオレフィンが副生する。出発物質がアキラルであるので、立体化学については議論できないが、中間体は上記のようなカルボカチオンであるので、立体化学は消滅しているはずである。



強い塩基性条件下では2分子脱離（E2）反応が優先する。塩基であるエトキシドイオンが塩素のβ位の水素を引き抜きながら同時に塩化物イオンが脱離する。この反応の立体化学を考察すると、脱離する水素原子と塩素原子はアンチ（anti）の位置関係にある。



立体障害の大きな塩基（ $t\text{-BuO}^-$ など）を用いると、空いている水素が引き抜かれるために置換度の低いオレフィンが生成する（Hofmann則）。

